

## 遣唐使船のふるさと

呉の南に位置する倉橋島に、桂<sup>かつらがはま</sup>浜<sup>なま</sup>という万葉集にも歌われている浜があります。そこにある「長門の造船歴史館」<sup>ながと</sup>には、今から千年以上も前に活躍した「遣唐使船」<sup>けんとうしせん</sup>が展示されています。白と朱<sup>しゆ</sup>に染められた船体は悠久の歴史を物語っているようです。なぜ、この船は倉橋に展示されているのでしょうか……。

あきみちは夏休みを利用して、祖父母の住んでいる倉橋に遊びに来ていました。ふと祖父の部屋をのぞくと、なにやら木材でできた大きな船の模型がありました。

「おじいちゃん、この船の模型は何？」

「うん。それか。それは船大工さんにもろうた遣唐使船よ。」<sup>(もらった)</sup>

「遣唐使船？」

「ほうよ。昔、これに大勢が乗って、中国まで勉強しに行きようだったんで。すぐその桂浜にも、もつと大きな遣唐使船があるけん、見に行ってみるかい？」

「うん。行ってみたい。」

早速、あきみちは祖父と一緒に近所にある長門の造船歴史館を訪れました。そこには祖父の部屋にあったのと同じ形だけけれど、その何倍も大きい船が建物の中に展示されていました。

「これが遣唐使船かあ。でも、おじいちゃん。なんでこの船が倉橋に置いてあるん？」

「そりゃあ、ここがこの船の、遣唐使船のふるさとじゃけんよ。」

「遣唐使船のふるさと？」

「ほうよ。じいちゃんの聞いたところによると……。」

祖父の話は次のようなものでした。



きびだいじんにとつうえことば  
吉備大臣入唐絵詞 第1巻

今から千四百年前、朝廷からの使者が倉橋にやってきて、日本が唐に使節を派遣することになった。そのために大陸まで航海することのできる大型の船が必要であったが、ちょうど倉橋にはそれを造ることができる大陸から渡ってきた技術者たちがいたため、その船の建造を依頼に来た。

この最初の依頼以後、倉橋での遣唐使船建造が始まり、合計十八艘そうを建造したという記録が残っている。この数は遣唐使に参加した大型船の約半数に及ぶ。

今、展示されている遣唐使船は「海と島の博覧会」(一九八九年開催)のために、広島県と広島市の依頼を受け、地元倉橋の棟梁とうりようたちが復元したものである。

「へえ、そんな昔と今と、時代を超えて遣唐使船を造ったんじゃね。」

「ほうよ。わしの部屋にあった船の模型をくれた船大工さんもこれを造ったうちの一人でのう。最初は設計図も何も残つたらんけん、何から手を付けたらええか、さっぱり分からんかったらしいわい。」

「ええっ、設計図が無かったん？」

「ほじゃけえ、昔の絵を見たり専門家をお願いしたりして、一から造ったんじゃとお。」

「へえ。ほんまにすごいね。」

あきみちは改めて復元された遣唐使船を見ました。細部まで丁寧ていねいに造り込まれています。

(この船を復元した大工さんも確かにすごいけど、千四百年も前の、今みたいに機械が発達していない時代に、本当の遣唐使船を造った人たちもすごい。そんな人らがここにおったんじゃねえ。)

感慨にふけりながら、そんなことを考えているあきみちの背中に祖父がやさしく声をかけます。

「あきみちくん。ぼちぼち帰るかのう。」

「うん。おじいちゃん、今日はほんまにありがとう。また来ようね。」

家路についた二人を見送りながら、よみがえった遣唐使船は、静かにその舳先へさきを、遙か大陸はるの方向に向けています。



瀬戸内海を航海する復元された遣唐使船